

マレーシア、パソーでの吉良先生との生活

京都大学名誉教授 渡 辺 弘 之

1972年1月のこと、マレーシア、ネグリセンビラン州Pasoh（パソー）の森で実施されていたマレーシア、英国、日本共同の国際生物学事業計画（IBP）の隊員としてでかけたのに、マラリアと診断され、Kuala Pilah（クアラピラ）の公立病院へ入院するなど、途中帰国を余儀なくされた。私にはその時が3回目の東南アジア渡航だった。熱帯での生活に少し自信を失いかけていたとき、吉良竜夫先生から、もう一度行かないかとお誘いを受け、1973年12月、再度、Pasohへ向かった。

といっても、このプロジェクト終了の最終メンバーであった。土壤動物に関しての自分の仕事や、安部琢哉さんなど他のメンバーの最後のデータ取りなど、忙しい毎日であったが、もっとも大きな仕事が大はジープ2台から小はピンセットに至るまで、すべての物品をマラヤ大学に引き渡すため整理し、リストをつくることであった。しかし、当時まだパソコンはなく、タイプライターの時代であった。ピンセットいくつ、シャーレ何個とカーボン紙を挟んでタイプしたのに、どこからかピンセットやシャーレがでてくる。手書きで修正するのがいやで、連日、やぶってはタイプしなおしていた。先に亡くなられた小川房人先生と2人だった。

そこへ1974年3月7日、最高責任者の吉良先生が来られた。物品の整理はほぼ目鼻がついていたし、プロジェクト終了に伴う種々の用件のため、

吉良先生を乗せてジープでKuala Lumpur（クアラルンプル）のマラヤ大学まででかけることが多かった。

プロジェクト終了間近というので、来客も多かった。そのお一人は、私にすれば雲の上の人であった『The tropical rain forest : An ecological study』（Cambridge Univ. Press, 1952）の著者P.W. Richards教授夫妻だった。フタバガキの大木につけられた木製の螺旋階段のタワーへも案内したのだが、スカート姿のご夫人の下からついて上がっていくのも失礼と考え、先に登ったのだが、私のジャングルブーツについた泥が上から落ちてきたはずだ。

3月24日、先生と二人だけで1泊2日の旅に出



図1. パソーの森で（左から小川先生、吉良先生、Richards教授ご夫妻）。

た。1日目はKuala Pilahをでて北上、Temerloh（テメルロー）、Bentong（ベントン）を経て、Genting Highland（雲頂高原）まで307kmのドライブであった。途中、近くに石灰岩の山がでてくるとちょっと寄って行こうといわれた。オオケマイマイなどマイマイが多かったが、吉良先生は学名であの仲間だといっていた。保育社の「原色日本貝類図鑑」の著者吉良哲明さんがお父さんであることは知っていたが、先生自身も植物以外にもマイマイにはかなり詳しくあった。しかし、午後になると、助手席で眠っておられた。

カジノで有名なGenting Highlandへ登ったのはこの時がはじめてだったが、遠くにKuala Lumpurの灯がまたたき、寒いところであった。ホテルでは前払い、カジノですって払えなくなくなるのを避けるためだ。おまけに長袖でないと入れないという。長袖などもってきていなかった。これはホテルで貸してくれたように覚えている。私は少々気があったのだが、吉良先生は「ちょっと稼いでみますか」とはさすがにいわれなかった。レストランではビーフステーキを食べたが、ボーイがもってきて奨めたワインを一口して、これで

いいといわれた。その当時もアルコールにきわめて弱かった私、一口で致眠量に達し、バタン、キューだったはずだ。吉良先生が一人で1本あけたということだろう。しかし、問題はその後だった。当時は貧乏旅行、ツインの部屋へ2人で泊ったのである。隣で静かに寝息をたてられているすぐそばで、おならをしてはいけない、いびきをかいてはいけないと、大先生との同室に気を使った。冗談に、外が明るくなると同時に外へでたが、酸欠状態だったといったことがある。眼がさめても明るくなるまで息を潜めていたということである。吉良先生とツインの部屋で寝たなどという経験、そう多くの方がお持ちではなかろう。貴重な経験であった。

帰りはGunung Ulu Kali（グヌンウルカリ）からBentongへ出たが、峠の茶店で以前ここに3本角の大きなアトラスオオカブトがあったというのを聞いて、欲しかったカブトムシが手に入るかもと、「Kumbang Badak（マレー語でカブトムシ）、Beetle」といってみると、おやじがビンをもってきた。灯油臭い。カブトムシは灯油の中にほりこんであった。一つ8ドルだというのを、ビンごと20ドルで買った。中には大きいもの3匹、小さいもの2匹、メスなど3匹が入っていた。帰りは202kmのドライブであった。しかし、あれからもう37年になる。私が古希を越えたのである。先に小川先生を、そして今、吉良先生とのお別れである。

このあと私はPasohへは1994年に国立環境研究所の研究をみせてもらいに、2000年にはKuala LumpurであったIUFRO（国際林業研究機関連合）世界大会のインコングレス・ツアーに妻と参加し、2002年にはパソーに滞在し研究していた指導学生に会いに、そして、2010年にはNPO「自然と緑」のメンバーを案内するなど、何度も訪れている。周辺がアブラヤシに換わっているな

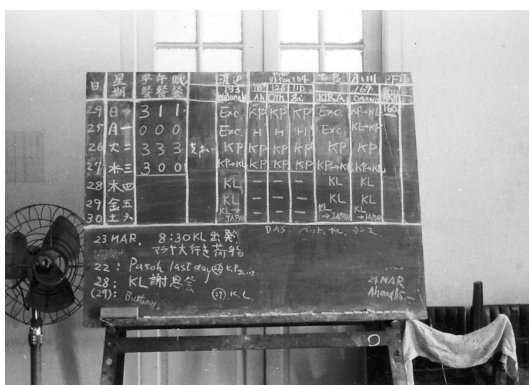


図2. パソーでのIBPプロジェクト、最終日の黒板の日程表。3月24、25日、吉良・渡辺がExcursion, 27日に3人ともKuala Lumpurを出ることになっている。

どの変化はあるが、中に入れば、一瞬、昔の私に戻っている。

私もこの7月のインドネシア、Bogor（ボゴール）行きで海外渡航が108回になった。少しは経験と知識を得たようだ。あの当時のお元気な先生とその当時の私でなく、今の私でPasohの森を歩きたい。もう少し、会話がはずむはずだが、それ

もかなえられなくなった。

参考文献

Richards, P. W. 1952. The tropical rain forest : An ecological study. 450pp. Cambridge Univ. Press, Cambridge.

